今月の範囲

第一部　基礎編
第四章　普通道徳から最高道徳へ
三、聖人の精神の継承と発展

モラロジー研究所の概論講座で使用される改訂『テキスト モラロジー概論』について、今月は「人類の教師」といわれる諸聖人の共通点を図解します。

図解！
モラロジー入門⑬

モラロジーを楽しく、平易に学びたい――。そんな要望にお応えして、この連載では改訂『テキスト モラロジー概論』の内容を図で解説します。ご自身の学習に、あるいは勉強会の資料としてご活用ください。

構成＝「れいろう」編集部

諸聖人の精神の継承と発展

――「最高道徳」に学ぶ

教育研究室研究員　江島顕一（えしまけんいち）

現代社会には、複雑で深刻な問題や課題が山積（さんせき）しています。モラロジーでは、その改善・解決の糸口を世界の聖人（ソクラテス、キリスト、釈迦（しゃか）、孔子（こうし））の心づかいと実践に求めています。そして、聖人に共通する、自己の利害を超えた道徳を「最高道徳」と捉（とら）えています（前号「最高道徳の特質」）。

こうした聖人とその精神は、紀元前六世紀から紀元後一世紀にかけて、地球上の四つの地域に並行して誕生した人類の「精神革命」とも呼ばれています。

すなわち、人類の心の内に変革が生じたのです。その後、聖人の精神は弟子や門人によって受け継がれるとともに、広く行き渡り、今日では、図14に整理されているように、それぞれが哲学・倫理学、キリスト教、仏教、儒学として、多くの人々に影響を及ぼしてきました。こうして諸聖人の精神は時代や地域を超えて、維持・発展される、いわば道徳の系統として、今も私たちに生きる指針を与えてくれています。

しかし、一方で諸聖人の教説は、学問や宗教という形として、受け取る人や、

図14　同時期に誕生した諸聖人

名前	ソクラテス	イエス・キリスト	釈迦	孔子
生歿	前470～前399	前4～後30頃	前463頃～前383※諸説有	前551/2～前479
生涯	40歳ごろから思索を始め、市民との対話を通じて、あるべき生き方を説いた。毒杯を仰ぎ刑死	30歳のころに洗礼を受け、神の子としての自覚を持ち神の愛を伝道した。十字架にかけられ刑死	29歳の時に出家し、35歳の時に菩提樹の下で真理に目ざめ悟りを開いた。病で死去（入滅）	52歳の時に魯の官吏となるが、後に去り、14年間諸国を遊説し、徳治政治を説いた。74歳で死去
継承者	プラトン、アリストテレス	ペテロ、パウロ	摩訶迦葉、阿難陀	顔淵、子貢、曾参、子思
文献	『ソクラテスの弁明』、『クリトン』	『新約聖書』	『スッタニパータ』、『ダンマパダ』	『論語』
言葉	「ただ生きるということではなく、善く生きるということ」	「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」	「あらゆる生きとし生けるものが安楽であるように」	「己の欲せざるところは人に施すことなかれ」
概念	プシュケー（魂）、アレテー（徳）	アガペー（神の愛）	ダルマ（法）、ニルヴァーナ（涅槃）	仁、忠恕
現在形	哲学、倫理学	キリスト教	仏教	儒学
一貫性	人心の開発と救済			
共通性	最高道徳の実行者			

諸聖人は地球上の東西にわたる地域に同時期に誕生し、
人類の教師として生きる指針を示しました。
モラロジーでは、諸聖人の精神や事績に共通する道徳を「最高道徳」と名づけています。

文化によって独自の解釈が生まれ、さまざまに派生していきました。その過程で、宗教などでは衝突が引き起こされてきたのも事実です。こうした対立の歴史を繰り返さないように、人類は今、新たな段階を迎えているのです。

その一つに、今日、グローバル化が進む中で、宗教や文化の違いを乗り越え、互いに多様性や特殊性を認め合い、共生を図ろうと、人類共通・共有の「コモン・モラリティ」（共通道徳）を形成しようとする動きがあります。

モラロジーは、諸聖人の示した「最高道徳」を固有の宗教や文化の中にとどめることなく、その多様性や特殊性の中に共通性を探り、現代の諸科学の知見も取り入れつつ、人類の安心、平和、幸福を実現する道徳を確立しようとする学問です。

そうした意味では、今日人類に求められている「コモン・モラリティ」の形成に、あるいは新たな倫理・道徳の構築に、モラロジーの「最高道徳」は大きな示唆（しさ）を与え得る可能性を十分に有しているのです。